

随想

みちのく風汗漬

大野 瑛子

熊本へ転勤が決まったのは、一昨年の二月だった。
電話口で、テレたような、強いて無表情をつくらうような声で、それを夫が告げた時、「遠いな」といった実感が、こぼれぽちも湧かなかったのは、いま、思い返してみても不思議な気がしてならない。

九州は見たところ、石ころのよう、そこに転がっているのはいか。歴史の重みをガッチリ支えた古い町もある。南国の空は青く青く、あくまでも青く広がっているのに、これからは、朝な夕なにして阿蘇は……これからは、朝な夕なにして阿蘇は……これからは、朝な夕なにして阿蘇は……

うよ、大きくって、まっ赤で」と声をうわすらせて調子を合わせる。
間もなく帰宅した夫が、見据えるような目で、「遠いところだよ」とポツンとつぶやいても、スツと素通りさせて鏡舌をやめようとしないうわたり。夫はそういわたしの騒ぎようを、どうにも中途半端な表情で眺め、うさん臭さを露骨に目に表していた。しかし、母親の別れの愁嘆場が全くカットされたことは、夫にとってもつけない幸いだったに相違ない。

ざわついた数日の後に会った親友のT子は熊本転勤を知ると、「熊本は九州の中でも一番暑いって言うじゃない。あなたどうするの？あなたのみちのく風汗漬の、オールドブルなんてただじゃないア、あなた一人倍暑がりだから死んじゃうわよー」そう、クーラー買いなさい。亭主質に入れてもクーラーは必要よ」と、最高の妙案を思いついたかのよう

長い冬から抜け出して、控え目な日の光がやさしい二月末の仙台で、九州の夏を考えてみるという、どだい無理な話。熊本って南端の鹿児島よりも暑いところなのか、どうしょう。大事な旦那様を質には入れられないし、では、せめて夫に三洋九洋して、夏の間だけ、里帰りさせてもらおうか、といささか心細くな

不安定な感情の動きとなって、幼なく表われたのかも知れない。

友の戯言ともいえる、九州の住みにくさといったことが、懸らぬでもないまま、家の中の片付けや、挨拶回りに追いかけれ通しのいく日か過ぎて、ある一夜、夫の先輩宅に夫婦で招かれた。

「オクサン、熊本は、鹿児島と同じように男尊女卑ですよ。ご主人と一緒に並んで出歩くなど、もってのほか、夫が右向けと言えはひたすら右を向く。とに角、すべて、ご主人のお気に召すまま。オクサンにとって、ご主人のところに行くなら、災難だよなア」と。

かなりアルコールが言わせたことばとして、話半分としても、確かに災難だ。靴下、どころではなく強くなったといわれる日本女性が、南の一つのブロックで、そのような扱いを甘んじて受けているはずがない、まさかノと打消しながらも、ニューウツだった。

現代と能楽

滝本 悠雅

能楽というものを「敢て」というもの」と説明しなければ「能楽」というものがどんなものか、わからぬとおっしゃる人がかなりの人口比率を示している。六十年前、足利義満の時代に、なにという名人が大成して、その後どうなっているか、一言にしていえば、つまり書かないが、一言にしていけば、つまり日本の芝居のご先祖様ということになる。われわれ大和民族の宗教は、仏教が始まりだと考えられるが、それはそれ以前に神道があったように、日本の芝居は歌舞伎が始まりだと考えている人達が巷間ザラである。しかも、そんなクラシックは現今すでに死滅してしまっているかといえ、そうではなくて、国体と共に弥栄に栄えている。死物化した昔の遺物でなく、いまもなお生きつづけているというところは、古典生命力の不可思議と言わざるを得ない。

ヨーロッパの演劇は、ギリシャ演劇に始まるよく言われるし、象徴劇、写実劇を問わず、なんといってもあちらには勝てないとして、明治以降の演劇人ことに新劇人たちはスツカリ魅せられてしまっている。その吸収に汲々として最近に及んでいる。それだけに、故国の演劇に一種の卑屈感さえ抱いていたようである。とうてい、世界の舞台に押し出されるものではないとして、然るに、日本古典劇のこの能楽に注目し、これを研究対象とす

る欧米人が出はじめてすでに半世紀以上にもなるか。とたんに驚いたのが日本の演劇人たちである。先さまに尋ねられても説明すら出来ない。他人に言われてわが家の家宝に仰天したようなものである。ウチの馬鹿だが、と見くびっていたセガレが「お宅の坊っちゃんはお宝を持たせたら巨人の星ですよ」と言われて見直すたぐいである。足元のことはとかくわかりにくいものらしい。

能楽は、オペラや京劇と同様に一種の楽劇だから、近頃のリアルな演劇を見た目には日常話的でないだけにわかりにくいには違いない。従って、スジもわかりにくいし、スジのわからぬ芝居など便器のコーンシャルほどにも興味は湧くまい。にも関わらず、鑑賞に堪能陶酔できるといふのは何事だろう。

まず第一に考えられることは、この種象徴劇は音楽一般と同様、ムードで受けとめることが肝心だということである。この受けとめ方を心得た能楽ファン達は、現実に泣きぬれたり喜んだり、ただならぬ充実感情に魂の底から感嘆の声を放っている。能楽は現代にも生きものであるに違いない。一度でたくさんという演劇や映画はリアルなものの方に多く、クラシックは割りと長もちするの

も妙である。いつまでも見飽かぬ書画こそ、優秀な書き手をするものたぐいである。また、竜安寺の石庭ではないが、無駄という無駄を思い切り捨ててしまった簡素化単純化の好きというものはどうだろ。ペラペラと無駄口の多過ぎる昨今の社会相とは裏腹だが、大変な魅力である。これもまた能楽効果の大きな一ポイントである。

ントである。理屈を抜きにして没入してける演劇、自他一体の劇構造——語れば色々の特殊な要素がある。サルトルではないが、実存の演劇というものがあんならば、それは日本の古典劇能楽ではないか、とすでにサルトルその人が語っている。最近、能楽にあこがれるあまり、その外形的な構造にのみ目を放ってこれを模倣し、得たり顔する新劇人たちがあ

(能楽師・歌人)

テレビをみつめる目

深沢 秀雄

東京都豊島区立高松小学校、工藤善道君の詩(「朝日新聞」五月二十六日付八小きな目)

「大橋きよせん」
テレビをつけた／大橋きよせんが
マインシャルに出て／「ハツパフミンミ」といった／チャンネルをかえる
と／また出てきて／こんどは／「スラリベチ」といった／ほかの局にすると／こんどは司会をしていて／大

橋きよせんがおっかけてくる／ぼくは／テレビをけしてしまつた

小学生と云えば、一番テレビが好きでいつもテレビにかじりついている年代だと思ふがその子達が、近頃のテレビ放送を見て、こんな詩を書くようになってしまった。

毎日のテレビ放送を見ていると、すばらしいアポロ宇宙船の月旅行中継をはじめ、世界のいろいろな出来事、日本各地の話を伝えるニュース、世界各地の生活を写したフィルム取材番組、スポーツ放送と、テレビならではの興味ある番組が放送されているが、工藤君の詩を読んでは、……どうしたものかと惑わさるをえな。

ところで、ラジオ放送の聴取率が、このところぐんぐん上昇している。これは社会情勢の変化による生活環境にもよるが、十年前テレビ放送の出現によって、大きな打撃を受けたラジオが、いかにして巻返えすかという研究を重ね、努力した結果、そろそろラジオの個性が発揮されはじめたといえるし、同時に十年間の栄華をむさぼったテレビが、その能を使い果し、壁にぶち当たって低迷しているためではないかと思ふ。

勿論、ラジオ、テレビそれぞれに特徴があり、その持ち味を生かした放送を作らねばならないことはわかっているが、テレビ放送の場合をみると、放送局やポンサーが今一番気にしているのが、番組の視聴率のようだ。数多い放送番組の中にあって、自分の提供している番組が

多くの人々に視られているだろうか……大いに気になるものである。いかにして視聴率を上げるか、制作陣は必死に頭をひねる。その結果は、奇抜なアイディアの競争、視聴者ごみに走って、これでもかこれでもか式のあつかましい番組が生まれて来たようだ。そして、視聴者もそれに興味を持ち視聴率が高いというのだからどうしようもない。ひと時いわれた「国民総白痴化」の病に犯されて、誰もそれに気がつかないでいるのかもしれない。ただ、今こそ放送局自体が、視聴者ごみにばかり迎合せず、もっと自主的指導性を持つべき時だという意見をよく耳にすることも事実だが、……もつと、みんなが知らないことを知らせてもらったり、みんなで見てもえたりするような番組の視聴率が高くなるように願わずにはいられない。

ローカル制作の放送についても、一般視聴者や番組審議会委員から「ローカルに密着した番組の制作」を強く要望される。また、その事を常に頭に入れて考えるのだが、これ程、テレビ放送が普遍化した情報時代のローカル制作の放送とはなんであるか、じっくり考えなければならぬと思ふ。

ローカルの人達がテレビに出演する。また、ローカルの風物や生活を紹介する……これだけでは、本当にローカルに密着した番組とはいえないような気がするからである。

(熊本放送・テレビ制作部長)